

4 その他

4.1 ヒアリについて

4.1.1 ヒアリとは

南米原産のヒアリ *Solenopsis invicta* は、攻撃性が強く、刺された場合体質によってはアナフィラキシー症状を起こす可能性があるなど人体にとって危険な生物である。また、在来のアリ類を駆逐してしまうなど生態系への影響が懸念されており、「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律(外来生物法)」に基づく「特定外来生物」に指定されている。沖縄県内では沖縄県対策外来種リストにおいて、まだ定着はしていないが侵入した際の生態系への影響が大きい外来種である「重点予防種」に指定されている。



ヒアリの働きアリ



ヒアリの巣

4.1.2 ヒアリの基本的な生態

ヒアリも含めアリは、ミツバチやスズメバチなどと同じ社会性昆虫である。その特徴は、産卵を行う少数の女王アリと、幼虫の世話や餌集めなどを担当する多くの働きアリが、分業をしながら巣の中で暮らしていること。働きアリが大量に死亡するなど巣に異変が生じると、女王アリは巣を捨てて逃げ出すこともある。このため、ヒアリの防除を考える際には、働きアリの駆除だけでなく、女王アリや幼虫を含めた集団の駆除を念頭に置くことが重要なポイントとなる。



ヒアリの女王アリ

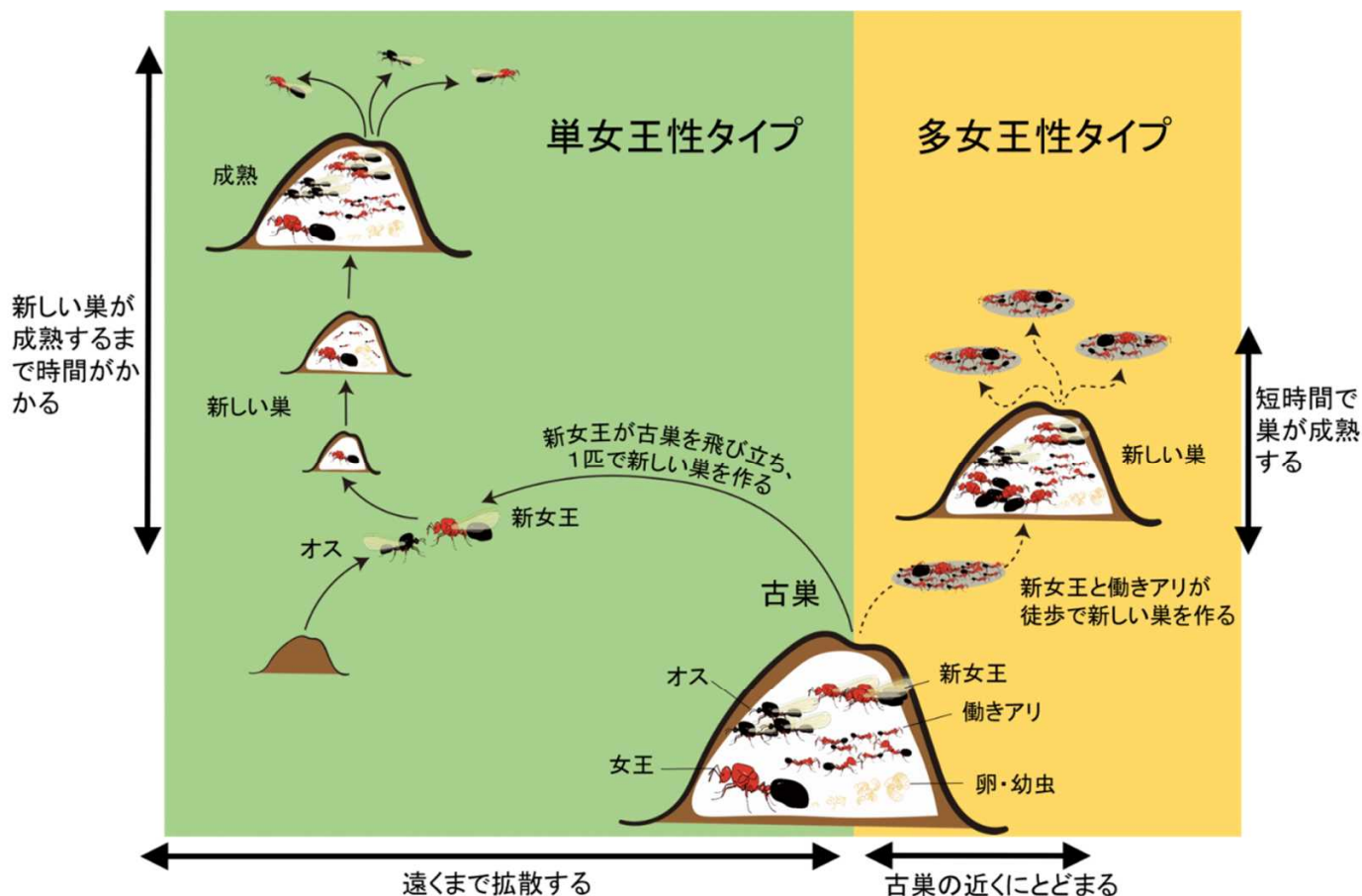


ヒアリのオスアリ



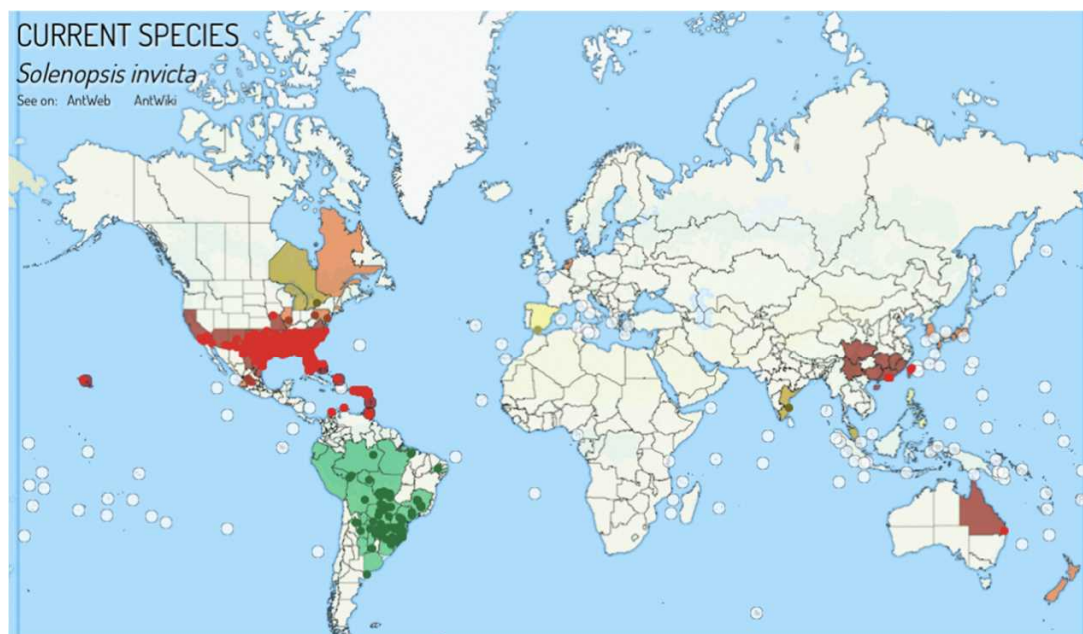
ヒアリの巣の中(白いのは卵や幼虫)

ヒアリのコロニーには単女王制タイプ(ひとつの巣の中に1匹の女王)と多女王制タイプ(ひとつの巣の中に多数の女王)の2つのタイプが知られている。新しい巣のでき方もこの女王タイプによって異なり、単女王制コロニーは羽アリを飛ばして巣から離れた場所に新しい巣を作るのに対し、多女王制コロニーでは巣内や近隣で交尾した女王と働きアリの集団が徒歩で新しい巣を作る。そのため単女王制コロニーは拡散距離が長く(数キロ先まで飛ぶことが可能)、多女王制コロニーは拡散スピードがより速い(成熟し次の巣を作るまでの時間が短い)という特徴がある(下図参照)。ヒアリの防除を考える際には新しい巣を作らせないことも重要となるため、羽アリを飛散させないことや巣分かれさせないことも大事なポイントとなる。



4.1.3 ヒアリの世界的な分布域

ヒアリの原産地は南米だが、20世紀半ばに北米(南西部)に侵入し定着した。その後21世紀に入ると北米から、オーストラリア、中国、台湾などに侵入していった。ニュージーランドでもヒアリが見つかったが、根絶に成功し定着はしていない。

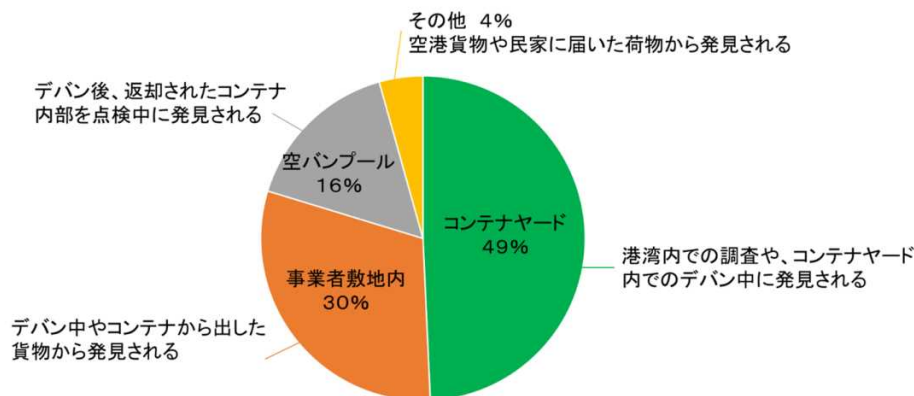


■ 原産地 ■ 外来種として定着 ■ 侵入経験あり未定着 ■ 不確定

2019年現在のヒアリの分布域

(Ant map アントマップより <https://antmaps.org/?mode=species&species=Solenopsis.invicta>)

日本では神戸港などで2017年に中国からのコンテナからヒアリが発見され、2020年1月時点では48件の事例が報告されている。これまでの国内ヒアリ発見事例の中では、コンテナヤード内の地面や、事業者敷地内でのデバン中(コンテナ内部から貨物を取り出している最中)にコンテナ内部で見つかることが多い。ヒアリは、地面に巣を作るだけでなく、朽木のような自然物から、機械部品や電子機器、自動車の中などの人工物の空間にも巣ごとまぎれ込むことが知られている。これまで日本で確認された事例には、腐食したコンテナの床板の中から発見されたものや一般家庭に運ばれた荷物の中から死骸が発見されたもののほか、米国から航空機で運ばれた貨物からも発見されたものなどが含まれる。



これまで日本国内でヒアリが発見された場所

(環境省ヒアリ確認事例一覧 <https://www.env.go.jp/nature/intro/2outline/attention/hiari.html> を改変)